わいわい、がやがや、みんなで哲学

場所　〒502-0812　岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

第155号
2021年6月

哲学カフェ de ぎふ
千秋（せんしゅう）まちかど文庫　通信

運営委員会発行(記録：安藤彰浩、編集：中川健史)(主宰：吉田千秋 090-7917-9602　yoshida0@sepia.ocn.ne.jp

第155回例会記録　2021.5.13

≪女性観、男性観、そして人間観を見直す≫

「日本社会における男女平等問題の根っこはやはり深く、一筋縄にはいかないですね。女性蔑視、差別をしていないと思っていても、女性からすればそうではないことがいっぱいある。根底にある一人ひとりを大切にする人間観を培うことの大切さを学べたようである」

問題提起　吉田千秋（主宰）

・今日は男女平等、男女差別の問題を取り上げます。問題が認識され政治課題となって随分年月が流れました。この間、改善された点はありますが、真の解決には程遠いのが現状です。女性の社会進出も進みました。しかし、男性と同様の機会を与えられていないと感じる女性は少なくありません。女性が、仮に男性の同僚と同等以上の能力を持っているとしても、日本社会で管理職の様な組織の意思決定を行う地位を占めることは稀です。私たちの社会は多くの課題を抱えています。

・女性の力を十分活用しているとは言えない現実は、社会全体の脆弱性の表れでもあります。記憶に新しいところでは、オリンピック組織委員会の会長を務めた森喜朗氏が、女性蔑視発言で辞任を余儀なくされました。オリンピック運動の目的を定めたオリンピック憲章は、民族、人種、男女等、あらゆる差別の廃止を明確に訴えています。オリンピック運動が掲げる理念を全く理解していない者が、大会組織委員会の責任者だったという事実が、残念ながら日本社会の実情を物語っていると言えます。

・私たちは私たち自身の女性観、男性観、さらに人間観について問い返し、日本社会の在り方そのものを見直す必要があります。憲法記念日に、新聞各紙に、昨年5月の有識者によるジェンダー平等の要請が政府の政策に反映されたか否かについて、肯定的とは言えない検証結果の記事が掲載されました。同日発表のあった世論調査でも、64%もの人が男女平等は実現されていないと考えている、という結果が出ています。男女平等は世界的な流れですが、日本は取り組みが中途半端で立ち遅れているというしかありません。

・歴史を振り返ると、男女平等を求める動きは、全ての人間の自由と平等を求めたフランス革命の人権宣言の時代にさかのぼることができます。オランド・ドゥ・グージュという女性が、フランス革命の最中、女性に男性と同等の市民権を求める宣言を著わしています。性差の落差は、多くの言語において、「人間」を意味する語が、同時に「男」を表わす言葉であるという事実にそのまま反映されているように思われます。人権の確立の歴史的歩みは、主に男性の人としての権利の確立の歩みに過ぎませんでした。政治参加の歴史で、女性は始めから参政権拡大のプロセスから締め出されていました。欧米でも女性の参政権が認められるのは、わずかな例外を除いて、第一次世界大戦以降の事にすぎません。

・日本では、平塚らいちょうや市川房枝といった先駆者が、20世紀に入って、婦人参政権を求める運動を始めました。戦後、日本憲法の制定によって、男女同権は法理念において現実のものとなりました。しかし今なお、家庭や職場、政治や教育など、社会の様々な領域で、不合理な男女差別の慣行が取り除かれずに残っています。世界経済フォーラムがまとめた男女格差の報告書によれば、日本は156カ国中120位で、121位の前回と比べ進歩が見られず、相変わらずの後進ぶりを示しています。日本は21世紀はじめには、フランスと同程度の水準にあったことを記憶に留めたいものです。女性議員の数や女性閣僚の割合の様な政治の世界における男女格差は著しく、明らかに世界最低レベルにあります。対照的にフランスは男女同数を正当に義務付けるパリテ法を導入し、状況を飛躍的に改善させました。男女差別はどの国にも見られましたが、諸外国は改善に真摯に取り組んで成果を上げています。その分、旧弊を脱するこのできない日本社会の硬直性は

際立っています。

・政治の分野だけでなく、職場や教育現場では、男性が当たり前の様に優先的な扱いを受けています。先年、いくつかの私大医学部で合格点を取っていた女性受験者が、意図的に不合格にされていた事実が明らかになって、大きな問題となりました。また、夫婦別姓を求める声は大きくなるばかりですが、家父長的な家族観を脱し得ない保守系議員の抵抗は強く、戸籍法改正の実現には至っていません。

・性別役割分担を示す「男は外に出て職場で働く、女は家で家事に従事する」意識は、戦後の高度経済成長の時代に生まれたサラリーマン世帯の生活のイメージです。今や、共働きが当たり前になって、そのイメージさえ過去のものに過ぎませんが、いまだに多くの人々の考え方に影響を与えています。学校でも、家庭でも、優秀な成績を女性よりも男性に求める傾向があります。また、自治会（町内会）の様な地域の集まりやPTAでも男性中心に運営が行われ、会長はほとんど男がなると決っています。

・国連女性差別撤廃委員会の委員を務めた秋月弘子教授は、日本政府が本気で取り組んでいないと指摘しています。彼女によれば「社会全体を変えるために、先ず政治が行われる場所に多くの女性がいることが鍵となる。それゆえ、クオーター制を導入して一定の割合で女性を指導的地位に付けることが必要である。またそのために、平等実現のために一時的に女性を優遇する措置も効果的である」と述べています。

・清田隆之氏は、東京新聞3月8日の記事で、多くの男性は女性差別を「自分には関係ない」と捉えがち、と指摘しています。多くの男性は自分の差別意識に気づいていません。男性優位の構造があって、男性は様々な「特権」を享受していても、それは意識されません。男性は、逆に、「女性は“レディーズデー”や“女性専用車両”があって、得だよね」と考えたりします。そういう“標準”男性（デフォルトマン）は、システムに適合して生きていて、多くの事が「考えなくてすむ」「そういうことになっている」ために、女性や障害者の様な“標準”から外れた人たちの不便や不自由に気づきません。

・また在日韓国人ピアニストの崔善愛（チェ・ソンエ）氏は、“週刊金曜日”に寄せた記事で、女性蔑視の問題と天皇制の関連性を指摘しています。政府は現在有資格者が減少している現実を念頭に、皇位継承を安定的に維持するために有識者を集め意見の取りまとめを行っています。保守の人たちは男系を維持して来た伝統を楯にとって、頑なに、女性天皇および女系を拒否し、皇位継承を男系（可能な限り男子）のみに認める今の形を維持することを求めていて、改革は容易ではありません。

・ボク個人は、頭の中では男女平等論者でした。しかし、現実には、知らず知らずの内に、差別意識が心のどこかに入り込んでいたことを気づかされます。それはいろんな人から教えられますが、とりわけ自分の連れ合いによく指摘されます。やはり自分の身近な人たちからの指摘、注意は大切ですね。やはり男性は、世界が女性の視点でどう見えるかを知る必要があります。人間の認識はどうしても当人を中心とした一方的なものになりがちです。差別を受ける者たちの側にしか見えない、わからない問題がたくさんあります。

・いずれにしろ、克服しなければならない差別はまだまだまだ沢山あります。女性差別と並んで日本社会で根深いのが朝鮮人差別だと思っています。これはいうまでもなく朝鮮民族に対する侵略と抑圧の長い歴史的な産物ですが、この問題を根本的に解決してこなかった政府の責任が大きいのは言うまでもありません。女性差別も、政府自身が「女性活躍社会」というスローガンをかかげるだけで、政府の責任は重大でしょう。どちらも、歴史的・社会的・構造的な深い問題なので、しっかりと捉えていく努力を続けていかねばならないと思われます。その根本は、一人ひとりの人権を大切にする思想を核にした人間観・民族観だと思われますが、どうでしょうか。

意見交流

＊日本人の男女関係の在り方そのものが、男女差別の克服を難しくしている。男は男同士で、女は女同士で集まって友人関係などを育んで行く。男女の交際は特殊なものと見なされ、敷居が異常に高くなっている。学校では、男女交際は勉学の邪魔になって好ましくないとさえいわれる。社会に出てからも状況はあまり変わらない。男と女が友だち付き合いをすることはあまりない。この点が欧米社会の男女関係と大きく違っている。男女が互いのことを知らないということが問題を見えにくくしていて、男女差別の克服の障害になっている。

＊日本の男性は概して話を聞かない。女は日々の出来事を話したいと思っているが、男はそういう話題に興味を持たない。

＊個人差がある。若い世代は話をする者も少なくない。男女差別の問題はあるが、これからの社会は女性の能力を活用せずにはやっていけない。男が特権を手放したくないと思っても、人材を活かすという観点から、様々な差別は撤廃されていかねばならない。

＊自治会（町内会）は当たり前の様に男の集まりになっている。会長はほとんど男性と決っている。誰も疑問を言わない。

＊日本の政治分野における女性進出の立ち遅れは余りにひどい。外から指摘があっても、本気で変えようという意思がない。政治の世界における男性優位が変わらないから、社会全体もなかなか変わらない。男たちが集まって、物事を判断する限り、男女差別の克服は容易でない。

＊医学部受験において、合格点を取っていた女性たちが不合格にされた話しは驚きである。そこまでするかと思わざるを得ない。おかしいと思うことを平気でやっている。多くの者が、女は家事にむいているという旧い価値観を克服することができないでいる。

＊医学部は大学病院に人員を確保したいという思惑から、一定数以上の男性が必要だと考える。外科などは特に体力がいるから、女は不向きであるという先入観が働いて、男性を取りたがる。かつて大学院の選考委員を務めた経験がある。成績優秀な女性は少なくないが、選考委員を務める教授たちは男性を取りたがる。病院は上下関係のはっきりした縦型社会である。男性の多くは、女性は管理職に向かいないと信じている。

＊人は権限を持つことで満足感を覚える。だから上下関係で人を見がちとなる。単純に肉体的な力で上回る男性は優位な立場に立つ仕組みを作って来た。男性か女性かではなく、それぞれが適性、能力に応じた役割を演じることができる様にする必要がある。

＊不用意に適性とか能力とかを基準に考えることには用心する必要がある。多くの男性は、「子どもを産むのは女性で、女性は本質的に子育てに適している」と信じて疑わない。そこからさらに、家事は子育てのために家に留まる女性の仕事だ、という一見もっともらしい理由づけがなされる。適しているかどうかの議論をする必要はない。実際には、男性にも、子どもの世話や料理や洗濯は十分できる。だから産褥のために体を休める必要のある2カ月程度を除けば、男性が産休を取って、家で子どもの世話や家事全般を受け持つことが可能である。女性ももちろん、男性同様に仕事の上の成功を考える権利がある。重要なことは、男性も女性もどういう人生を送りたいと思っているかということである。

＊女性は子どもを産んで母親となる。母親と子どもの結び付きは、男性が持つことのできない特殊なものである。女性は押し付けられて子育てをする訳ではない。女性が子育てをしたいと思うことはむしろ自然なことではないか。

＊古い考えの人が少なくない事にしばしば驚かされる。娘が二人いるが、義母は男の子だったら好いのにと言った。女性は伝統的に家事に縛られ制約の多い人生を送らざるを得なかった。女の子は家事を手伝ってくれ、母親と娘は特に密な関係を築くことができる。

＊女性の側の偏見もあって、男女平等の実現を妨げる要因になっている。個別に如何なる役割を演じているかは別に、女性も男性社会の担い手であることを忘れるべきでない。

＊自分は母親を除き男ばかりの家庭の末っ子だった。家庭で当然の様に家事を任されたので、家事に抵抗感はない。教師になって、クラスで父親を集めて“男性の会”を開いて、例えば、「男らしさは何か」というテーマなどを議論した。

＊旧い世代に属する自分は、子どもの頃、一家を支えるのは男であると教えられた。男女平等などという考えを主張すれば、男性はもちろん女性からも嫌われた。

意見交流の最後に　吉田千秋

•私たちの人間観及び男女観はどのように形成されるのでしょう。すべてを生活環境、周りの影響に帰すことはできません。しかし生まれ育つ環境は確実に、個々の人間のものの見方、世界の見方に非常に大きな影響を及ぼしていると言えます。私たちは学校、友人、メディア等、私たちを取り巻く様々な人たちの意見や行動から影響を受けて育ちます。とりわけ家庭の影響は極めて大きいものです。影響を受けるといっても、決して親の意見を丸呑みするといった一方的なものではありません。ボクの父親は明治生まれの職人で、旧いタイプの人間でした。頑固で、酒癖が悪く、時に暴力的で、よく母を困らせていました。子どもたちは皆、母に愛着を持ち、いつも母の味方でした。この子どもの頃の体験が背景にあって、私の中にある女性に対する憧憬、崇拝の気持ちが呼び起こされ、女性を応援したい気持ちに駆り立てられて来ました。その意味で父は反面教師だったと言えます。

•周りから影響を受けるのは子どもだけではありません。私たちは、常に、自分なりに、良い悪い等の価値の判断しながら、身近な人の影響に反応して生きています。影響をまったく受けないでいることはできません。しかし影響の受け方、反応の仕方は様々です。少し距離を置いて、事実を見る力、本質を見極める力を身につけることが重要です。私たちは皆、相互に影響を与えあって生きています。そうした関わり合いは、私たちの人生を豊かなものにしてくれる大切なものでもあります。

•本質を見極めることが大切です。「主婦」と呼ばれた女性の在り方は、決して普遍的なものでなく、高度経済成長という時代の特殊な産物にすぎないものでした。純粋な形では決して多くはなかった「男は外で働く、女は家で家事に従事する」は、思想的、世界観的に男女の間に不必要な分断を作ってしまったように思われます。物事を単純に一つの枠にはめてしまわないで、多様なかたちを尊ぶように心がけることが大事だと思います。そこから自分なりのしっかりした人間観がかたちづくられるのではないでしょうか。

みなさんの感想、便り、意見など

○基本的に男女間には能力差はなく特徴があるだけだと思います。例えば、平均すれば、男性は筋力は女性より勝りますが病原体に対する免疫力、各種ストレスに対する抵抗力は女性が勝るというように。そしてかなりやばくなってきた

　人類の長期の生存維持に対処するには性別をとわず、能力のある人間が能力を活かせるポジションに就くしかないと思います。またなぜこのような男性による差別構造、支配構造が確立されたのか議論できたらよりこの問題の認識が進むのではないかと思います。日本の場合は天皇制というややこしいものが出てくるでしょうが、先送りするのもそろそろ限界が来ているかなと感じています。

（たなか）

○森喜朗氏の女性蔑視発言が西欧やアメリカですばやく大きく取り上げられ、批判の声も強くその方面から来た。それでも本人も「謝れば事は済んだのだ」と、辞任を考えてはいなかった。総理やその周辺も考えていなかった。国際的に発言への批判の声が大きくなって森さんは「オリ・パラ」の会長を辞任した。これが日本の現状である。歴史的積み重ねのある男女差別は　繰り返し、繰り返し問題とされて解決していく事だろう。　（アダム・スミス）

○＜女性にも“力”が求められる時代＞

　今回は、日常の家庭生活での生々しい事例も出て、地に着いた論議ができたと思う。反面、個々人に意識変革が迫られる部分も含むだけに、微妙に歯切れの悪さも残った。また、女性差別の意識は、子どもの頃からの親との生活の中で受け継がれるとの指摘が吉田先生からあったが、まさにその通りで、“刷り込まれた？”中身を変えようにも一朝一夕にはいかない。しかし、社会の流れが変わる中で、少しずつだが変わる部分もある。

　例えば、古くからの“女に学問はいらない”との観念について、個人的にこんなことがあった。長男・次男が高校を卒業する際、二人とも音楽系専門学校に行くことを望んだ。これに私は反対しなかったが、親戚筋からは「大学へやらんでも良いのか」と一言あった。一方末っ子の娘が大学進学を決めたことを告げた際は「嫁に行けなくなるのでは」と、やはり別の親戚だったが心配をしていただいた。

　その娘、卒業後更に大学院にも進み、一般の会社に就職し、やはり？結婚せずに頑張ってきた。そして近年二度目の通信制の大学院に学び、MBA（経営学修士）の資格を取った。その理由は、今民間でも女性を役員にする日が近いと社内でも言われていることと、会社に残るか又はどこかへ出向するかが分けられる年齢が早まっていること、その両方に備えて、とか。やはり世の中は変わってきて、女性にも“力”を求められているようだ。

　かつて一言いただいた親戚はもう物故者。そして私がその籍に入る頃には、更に進んでいることを、望めそうな気がするが、その時は女性の負担が増える側面も出てくる。また男性側の新たな対応が求められるだろう。（PHW）

○<「大垣事件公判の証人尋問」を傍聴して>
西濃地方での風力発電所建設をめぐり県警大垣署の個人情報漏洩などの損害賠償請求訴訟の証人尋問を傍聴した。コロナ禍のなか、傍聴者を抽選によって決める盛況ぶりは事件の関心の高さを示した。
今回は、事業者の中電子会社シーテック社の2名の証人喚問だが、裁判長をはじめ2名の女性裁判官の鋭い尋問に対して両証人ともに言葉に詰まる場面があり、司法の頼もしさを感じた。
裁判官たちは満席になった傍聴者を見て張り切った尋問になった面もあるが、最近問題になっている「女性の活躍」(前回の哲学カフェのテーマである)を充分発揮した場面であった。
来月は原告4名の尋問が予定されているが、残念なのは5月31日の公安警察官3名の証人尋問がいったんは被告側も受け入れほぼ決定していたが、被告(県警)の執拗な抵抗で中止に決定したことである。
我々は警察をはじめ行政サイドの違憲や至らぬ点を司法がただすこと(三権分立)を期待して公判を傍聴、注目して行きたい。　(井口)
○学校で座高を計測していたのは重心が低いと兵士の安定性がいいからだそうですね。神仏分離の政府施策。明治22年の帝国憲法で作られた現人神。明治23年の欽定憲法の発布、明治23年の教育勅語の発布を契機として、国家神道の天皇教が完成する。(神仏分離の動乱　思文閣出版を参考)教育者は積極的に天皇教を児童生徒に教えた。欽定憲法・教育勅語・天皇教・土台は儒教。儒教は身分制度を肯定している。立て社会。
　自民党の改憲案には天皇を国家元首にすると書かれているらしい。その次は教育勅語の現代版があると見るのが自然だ。亡国の死者(使者)を通してはならない。教育者は現代版天皇教を積極的に児童生徒に教えることになる。安定した経済生活や教頭や校長と言う役職願望などにあがなえず、現代版天皇教を積極的に児童生徒に教えることになる。
　日本では伝統的に上の者が…これは儒教の教え。立て社会・格差社会の肯定。横の文化が育たないのは儒教が生活の中に無意識に浸透しているからです。
上級国民(儒教の影響)意識が教育者にもあるということか。身近にある神社は国家神道天皇教の影響が残っていて地域に強い影響力を持っている。
今の憲法は横社会。まだまだ、横社会の文化はねづかない。自然農、私は自然栽培(木村秋則さん)のまねごとです。　(こうこうぶん　わへい)
○多くのトンネルを抜けて今に至る。仕事と子育て・娘の不登校・両親の介護と看取り。終えた時には、もはや自分自身の老いが待ち構えていた。種々の後悔で心が萎えてしまうが、「順繰り、順繰りだよ」と言っていた母の言葉に、救われもした。人間とは、生きるとは、そんなものか。
　今することは、自身が何を疑問視しているかをはっきりさせる事。以前から疑問に思っていても、どうにも分からないことは、価値観や体制の異なる国どうしの対立。たとえば、冷戦時代の米ソ、新冷戦と言われる現在の米中など、中身がよく理解できていない。要は、資本主義と社会主義体制ということか。
ヘーゲル曰く「人間の歴史とは自由と理性が実現していく過程である」と。少しずつでも良い方向に向かえばよいのだが、敗戦後から今に続く日本では後向きに歩む姿しか見えてこない。
まわりを見ると、この1年友人知人が4人ほど亡くなった。「あった時が暇乞い」と、昔聞いた祖母の言葉を初めて納得した。1人ひとり、生まれも育ちも違う人間がこの世で生きていく意味は？　せめて自分らしく思える生き方をして締めくくりたい。人との出会い、書物との出会い、そこに幾ばくかの希望を見出す。　(ひらつか)

<「通信」前号 (No.154) を読んで>

○通信、ありがとうございました。皆さんのいろいろなお話を一生懸命読ませていただきました。画面で読むのは、ちょっと疲れる？…かな？
でも、おもしろかったです。
　日本の“教育”の問題は、先生がおっしゃるように、本当に大変な問題ですよね。我が家の孫の通う中学校のモットーは「自由と協同」だとか。2019年に入学して、夏休みもなくていいというくらい、学校が楽しかったと聞きました。昨年からはコロナでオンライン授業が入って、中学生活もままならないようですが。
　”教育とは？”という大もとから、もっと考えていかなければと、私も思います。教組にも考えてもらいたいです。スウェーデンやオランダなど、他国の教育ももっと具体的に知りたいです。編集後記の先生の言葉に同感です!　(あ)

○哲学カフェ通信ありがとうございます。また、絵の掲載と作者名もありがとうございます。自分の絵が掲載されているのは少し気恥しいです。
　教育の内容ということもあり、賛同できる意見が多く学生として嬉しいのと同時に、同じことを思う人がいるのに世の中の変化が乏しいことに、ふと憤りを感じます。
　私が今年美術大学に入ったこともあり、本当にやりたいこと追求や、男女での制服(服装)の差などは常に疑問に思っており、これらのことは私たち若者も考えていかなければならないと思いました。
　私の卒業した名大附属高校では、三者協議会(生徒、保護者、先生)というものがありその場で「男女の制服の差」について毎年議論されていたのですが、遂に去年私服登校可となったそうです。
　このような事例を聞くと、他のことが私たちの力でも実現出来ることがあるのではないかと希望が湧いてきます。　(O.Tsumugi)

＜京都だより　その2＞　「京都に“別荘”（＝セカンドハウス）？」

「京の不動産に熱視線　地価高騰も投資マネー流入」、こんな見出しに目を引かれました。（京都新聞2021.4/20）京都のセカンドハウスの需要が増えているとの報道です。

「京都に“別荘”」と聞いて少し意外な感じがしました。別荘と言えば、月並みですがまず軽井沢が頭に浮かびます。80年代、軽井沢での自民党のセミナーで当時の中曽根首相の発言が大きく取り上げられたとき、発言内容に対する感想とは別に「わざわざ軽井沢まで行ってやらなくても。贅沢だなあ」と思ったものです。

この度のコロナ禍においては、災害も含めた非常時には社会的な問題が顕在化すると指摘されています。いわゆる貧富の差の問題もそうです。

政治の役割の一つは、憲法13条の「個人の尊重・幸福追求権・公共の福祉」に則り、徴収した税金を、日本に住む一人一人に公平に再分配することだと考えます。（他にも25条の「生存権」「国の社会保障的義務」もあります）

5月3日、全国憲法研究会の「憲法記念集会」をオンラインで視聴したのですが、その中で蟻川（ｱﾘｶﾜ）恒正日本大学法科大学院教授が、アメリカのジョン・ロールズ（1921～2002年）という哲学者の「無知のベール」という考え方を紹介していました。憲法制定の過程において、自分の立場（富裕層に属するか貧困層に属するか等）を知らなければ、「人は経済的自由を尊重するより最も不利な立場でも何とかなるようなものを作る。それが合理的な考えだ」というものです。自分と他人の生活や幸福を考えるとき、この考えは大切だと印象に残りました。

先に取り上げた「京都の“別荘”（＝セカンドハウス）」のことを知った際、富める者がますます贅沢ができるような社会がそのまま肯定されるようなことでよいのかと思いました。（「贅沢は“素敵”」ですが‥）

京都新聞の報道は、時事をただそのまま伝えただけですが、ジャーナリズムの役割を考えたとき、コメントとして控えめであっても、「財産のある者がより豊かな生活ができる社会ではなく、今コロナ禍で困窮している者への富の配分がもっとあってもよいのでは」という趣旨のことは、付け加えてよいだろうと思った次第です。　（Hiroaki）

＜世界一周貧乏旅　その21＞　「世界一厳しいイミグレーション」

「空港に着いたら別室へ送られ、そこで尋問を受ける」なんて、どこのテロリストだよって話ですが、はい、僕のことです。

いやいやもちろん僕は犯罪なんて犯していませんよ、むしろこの前お土産屋のおっさんに地獄に落ちろって言われたので、その人説教してやってもらっていいですかね‥え？　イランへ行ったかって？　はい、行きましたよ、イラン人の彼らはそれはもう親切で‥はい？　だから別室行きなんだって、どういうことですか？　僕はいつになったらイスラエルへ入国できるんですか？

さて、というのも、「イスラエルのイミグレーションは世界一厳しい」と有名です。怪しかったり、イスラエルと敵対している国（イラン、レバノンなど）への渡航歴がある人は、高い確率で別室で尋問を受けることになるようで、イラン入国のスタンプが押された僕のパスポートは、しっかりと審査官の目に留まってしまったのでした。

別室送りを宣告されて1時間後、やっと名前を呼ばれ小部屋に入ると、大柄の若いイスラエル人の面接官が座っており、本当に様々な質問をされました。

かなり突っ込んだ質問というか、「あなたのおじいさんの職業はなんですか？」のように、そんなの聞いてどうするの？と思いたくなるような質問が多々あり、慣れない英語面接というのもあって、部屋を出る頃にはへとへとになってしまいました。　空港に到着したのが午前1時、入国スタンプが押されたのがなんと午前4時。空港を出た瞬間にこれほど達成感を感じたのは、イスラエルが初めてでした。

ここイスラエルは非常に複雑な問題を抱えた国です。ネットでイスラエルのイミグレーションを調べてみると、「昔よりずっと入国しやすくなっている」とありましたが、5月に起きたイスラエルとパレスチナ自治区のガザ地区を実効支配するハマスとの交戦は12日間にも渡り、イスラエル側では12人、パレスチナ側では232人もの死者が出てしまいました。恐らく、イミグレーションは再び厳格に取り締まられてるようになってしまっているのではないでしょうか。

彼らの問題を複雑と一言で片付けてしまうのは、すごく不誠実なことだと感じています。ただ、人間はどうしても見聞きし体験したものに強く影響を受けてしまうため、ざぶざぶと感情が氾濫したみたいな文章では、誰かを批判するほど事実を表していないのではないかと疑ってしまうのです。

つまりは、僕がここに書けるのは事実のみであります。言うなれば、空港のイミグレーションでは「ようこそイスラエルへ」と言われ、エルサレム市内の駅前では「ようこそパレスチナへ」と言われたということです。

（カモノハシタニ）

小笠原博毅、山本敦久著『やっぱりいらない東京オリンピック』（岩波ブックレット、2019年2月）

いまそれこそ焦眉の東京オリンピック開催問題。世論調査では、五輪開催とコロナ対策は、両立すると思うが２１％、両立できないのでコロナ対策を優先すべきだが７１％に上った。（毎日新聞５月２２日）にもかかわらず、バッハ会長等のIOC幹部と日本の政府は、命より五輪と、がむしゃら開催を進めている。「新型コロナ勝利の証」としてではなく、「敗北の証」の泥沼に全世界を巻き込もうとしている。

さて、今回紹介する本書の発行年月に目を向けていただきたい。新型コロナが発生した年のはじめである。当時、東京での開催に反対する声は、例の「アンダーコントロール」発言や予算の膨大化、「東日本大震災からの復興」スローガンの虚構などによって、少なからずあった。だが、その声は大きくならず、理論的にもしっかりした内容が伝えられていなかった。

そういう時に、この二人の研究者は一貫して主張してこられた東京五輪中止論を、ブックレット版に収められたのが本書である。

コロナとは関係なく、著者たちの根拠ある主張は明晰である。まずは第１章「やってはいけない東京オリンピック」で、「復興」とはまったく正反対の事態が具体的に挙げられ、オリンピックは政府主催でもないのに膨大な公費（税金）が投じられ、「祝賀資本主義」の設けの場となり、国民は犠牲を強いられるだけである。

「参加と感動のからくり」では、国民だから「参加して当然」と促され、多少批判的な人たちも「どうせやるなら盛り上げよう」と、「ボランティア」として動員される。それの報酬は「感動」であるが、５０年前の東京五輪や、先年のラグビーワールドカップの際に国民が味わった感動とは異なり、「感動」は未来に先送りされ、空手形になる可能性が大きい。

第３章「オリンピックに支配されるスポーツ」では、近年のオリンピックの強大化が招いたスポーツ界への悪影響が指摘される。とりわけ、スポーツの商業主義化が勝利至上主義を招き、国家単位のメダル競争が熾烈を極め、競技者への暴力的支配が著しくなってきた。

第４章「社会を息苦しくするオリンピック」では、日本ではアスリートが自由な発言をしない、許されない状況はいまだに続いていることを念頭に置き、とくに開催問題に関しては「開催ありき」ははじめからあった。だが、開催を政治的に利用とする政権、利益を共有するスポンサー、その中軸にあるマスコミ関係などによる強大な言論操作が、日本社会をさらに息苦しくさせている。

結論として、小田実が６４年東京五輪時に語った「オリンピックはひとりであってにやってきたわけではない」をもとに、やはり東京大会はやってはいけないときっぱり述べる。

多くの人たちにこの際ぜひ読んでいただきたいものである・・廉価だし。　（sensyu）

例会への事前申し込みは不要です

例会会場案内

例会は、ポポロのふれあいスペースです

2021年前半　哲学カフェ、第25期の予定

例会は19:00～21:00です。
会場は、ふれあいスペースです。

第151回例会 1月14日（木）	「世の中を明るくするには何が必要か？」 ＊新型コロナ蔓延が「永続波」となり、ワクチンのみが明るい材料。だがどうか。 ＊コロナ危機で新たな変革の兆しが見えてきたが、これをどう実現するのか。 中止しました
第152回例会 2月11日（木）	「攻撃優先を進める＜理論＞と＜予算＞を問い直す？」 ＊コロナ対策のために膨大にふくれあがった予算は、一体どのように使われたのか。 ＊その影に隠れて推進される自衛隊の攻撃軍隊化。その危険な理論とムダ予算に注 中止しました
第153回例会 3月11日(木)	「2050年までに温室効果ガスゼロは可能なのか？」 ＊世界の趨勢にまったく反する政策をとってきた日本政府は、突然、ゼロ目標発表。 ＊これはCO2ゼロではなく、原発も含めているまやかしもの。これでいいのか。 終了しました
第154回例会 4月8日(木)	「教育で大切なことは・・コロナ危機を通して？」 ＊コロナ危機の中で、教育のあり方、内容、制度は変えざるを得ないことが生じた。 ＊少人数教育へ一歩踏み出したが、リモート教育の推進、管理主義、高い教育費は 終了しました
第155回例会 5月13日(木)	「女性観、男性観、そして人間観を問い直す」 ＊東京五輪開催にからんで、やっと問題化してきた日本における女性差別の深刻さ ＊問題の根っこは、女性＜男性の差別感覚の次元から、人間観の貧しさに目を向け ないか 終了しました
第156回例会 6月10日(木)	**「SNS、スマホ、マイナンバー制の功罪を考える」** ＊SNS、スマホなどの情報取得・伝達・交流手段は、個々人にも大きな効果・利益をもたらす。 ＊だがその手段を持たない者への差別して現れ、その情報が企業・国家によって一元管理されると、国民総監視化に・・。
第157回例会 7月8日(木)	創立13周年記念行事は休止。通常例会にします。 「資本主義って何だ、社会主義はどうなった？ この先めざす社会は？」 ＊ソビエト連邦の瓦解によって、資本主義は「勝利」した後、地球規模でますます強欲になり、破壊的になった。 ＊残存した社会主義の多くは変質した。さて、今後めざすべき社会はどのようなものか？

わいわいがやがや アラカルト

★女性の権利は、憲法24条に保障されている。「女性活躍推進法」なども施行されている。にもかかわらず、男性中心の日本社会では、男女格差は、後進国並みである。首相経験者の「女性蔑視」発言は言うに及ばず、特に政治の分野では、ひどい状況である。

★日本の男性、否世界中の男どもは、大なり小なり自分の女性差別意識に気づいていないのではなかろうか。なぜか？

＊一つには、男児の成長過程において、家父長的な「家庭環境」で育まれた精神構造の中にあるように思う。男児は父親の支配権力性と母親の夫に対する従属性を見ながら育つが、授乳の時から母親の母性・愛情の「支配」を受けて育つ。そして「甘え」や「マザコン」的精神構造が生まれる。

★ほとんどの男達は、大人になってもその心理的抑圧から脱却できていないようだ。結婚後も自分の配偶者に母親のような母性愛を期待したり、他の女性に対しても、無意識のうちに似たような「甘え」が出てしまうのではなかろうか。かく言う私も、「無意識の失言」をして、妻にしばしば叱られている。恥ずかしい次第だ。

★女性差別をなくするためには、先ずこのような「マザコン的」抑圧から男性を解放することも大事ではないかと考える。

★今一つ、男女平等を達成するためには、世界中の戦争をなくさなくてはいけない。駆り出されるのは男である。それゆえに、明治以降、意図的に「男性優位」思想が、国民にたたきこまれたのではないだろうか。いいかげんそのような偏見や価値観から脱却し、男も女もなく人間として平等に扱われる世の中になってほしい。

（島田幹夫）